

Title	宗教社會學序説
Sub Title	
Author	向井, 鏝一 (Mukai, Eiichi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1934
Jtitle	哲學 No.12 (1934. 8) ,p.147- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000012-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宗教社會學序説

向 井 鏌 一

宗教社會學が一個の獨立した學としての存在權をもつて居ることに就いては今日殆んど異論がないと思ふ。然しこの宗教社會學なるものが漸く一つの學問的體裁をかち得るやうになつたのは、比較的最近——即ち十九世紀末葉——のことに屬する。従つてこの學の問題、方法等に就き今日なほ多くの晦迷の存するのも又止むを得ぬことである。主としてその問題に就き多少なりとも明確を期したいとするのが本論の目的とするところである。

宗教社會學に對する寄與は、宗教學者の側からも社會學者の側からも爲されてゐる。一般宗教學に在つては、從來は殊にその體系的研究に於て、考察の眼を主として、宗教の理論的部分たる神話、教義、信條、神學乃至は宗教の實踐的部分たる禮拜、

儀式に向けてゐた。然しその際、宗教生活の他の方面即ち社會的方面は等閑に附せられて居た。かゝる事態に就きトレルチは言つてゐる。「人々が宗教を純粹觀念的に、或は信條として或は教義として或は形面上學として或は又一定の宇宙觀と結び付いた道德として解してゐた間は、かゝる題目——宗教社會學の題目と相似たる——は一般に意味のないものであつた。」^(註一)然るに近來、基督教の研究に於ても佛教の研究に於ても其他の宗教研究に於ても、社會學的問題に對する關心は勃然と起りつゝある。又、所謂自然民族の文化を研究する人類學に於ても、宗教的社會的な狀態及び現象に益々多くの意義が認められつゝある。乃ち此れら各方面に、現在のところ何等の接觸なく行はれてゐる宗教社會學的勞作の中に、一の統一的な學的領域が示唆されてゐると見るのは、強ち無理ではないと思ふのである。

次に宗教社會學に對する企圖は、一般的なる社會の學たる社會學の方面に於ても之を見ることが出来た。宗教が單にその個人性に終始せず社會學的現象形態を呈示してゐる以上、それが社會學にとり、殊に文化現象の社會學的考察を以てその主要な仕事とする文化社會學にとり好箇の研究對象たるは云ふまでもない。斯

くて社會學者の側よりも宗教社會學に對する多くの寄與が爲されてゐる。此處では其の一々に就いて瞥見を加へるわけには行かないが、たゞこの方面に於て寄與する所多き二三の學者を挙げれば、マックス・ウェーバー(Max Weber)、ヘルンスト・トレンチ(Ernst Troeltsch)、ウエルネル・ゾムバルト(Werner Sombart)、ルドルフ・ゾーム(Rudolf Sohm)、マックス・シェーラー(Max Scheler)、エミール・デュルケーム(Emile Durkheim)等である。

以上述べた如く、宗教社會學に對する企圖は、宗教學者の側からも又社會學者の側からも爲されて居るが、然らば斯かる宗教社會學なるものの問題乃至課題は如何なるものであらうか。

言ふ迄もなく、宗教社會學なるものの存在は、宗教の社會性乃至は宗教と社會との間に於ける或る種の關聯を容認しての事であるが、これらのことが如何なる意味に於て云はれ得るかの決定は、自ら宗教社會學の課題を決定するものと云はなければならぬ。所で今宗教の社會性に就いては問題はないと思ふ。私は今此處で詳論することを避けたいが、この點は例へば次に述べる如く諸家のよく認め

るところとなつてゐる。例へば「第十九世紀の教父」と呼ばれるシェライエルマツヘル (Schleiermacher) はその『宗教論』第四編「宗教に於ける社交的な成分について」に於いて次の如く述べてゐる。「苟くも宗教が在れば、それはまた、必然的に社會的であるべきである。これは人間の性質上しかあるばかりでなく、又全く何よりも宗教の性質上しかあるべきものである。人間が折角己れが衷に造りなし、且つ仕上げたものをまた己れが衷に閉ざし匿して置かうとするならば、それは極めて不自然であることを諸君も認めなければなるまい。……即ち諸君の見る如く、ここでは、かの他の人々をも我々に類似せしめようとする、努力の問題でもなく、また我々の衷に在るものは萬人にとりて缺くべからざるものであるとの信仰の問題でもなくして、たゞ我々の經驗する特種な出來事の社會共有的本性に對する關係を會得するといふことの問題に過ぎない。」^(註三)又クローレー (Cooley) は次の如く云つてゐる。偉大なる諸宗教——佛教、猶太教、基督教、回教——は若し體系がなかつたならば何ものでもない。即ちたとへ人間性の基本的要求に基いてゐるにもせよ、それらの擴がりたる宗教としての存在そのものは、社會の變化する状態に適應する所の

社會的構造に存してゐる。以上の要求はこの構造の中に見出され、又之により培はれるのである。^(註三)又エルウッド (Ellwood) によれば、宗教は人間の人格的並びに社會的の根本的價值を全體としての宇宙に投影すると云ふことである。然し彼は更につけ加へて云ふ。「宗教はその本質上個人的と云ふよりも寧ろ社會的のものと云はなければならぬ。言語と同じやうに、宗教は社會生活に必要である程、個人生活に必要ではない。此れは何故であるかと云ふと、宗教の取り扱ひ、投影し、而して普遍化する所の價值は單に人格的價值たるに止まらず、社會的價值であることに基いて居るのである。^(註四)今上に擧げた此等學者の何れの所説に於ても、宗教の社會性乃至は宗教と社會との關聯は何等かの意味に於て問題となつてゐる。從來主として宗教に關して爲されてゐた内面的個人主義的解釋とは異つた社會學的解釋が企てられてゐるのである。この點については問題はない。が、問題は、先に觸れて置いた如く、然らばこの宗教の社會性乃至は宗教と社會との關聯は如何なる意味に於て云はれ得るやと云ふことにある。然もこの點に答へるには、我等は豫め宗教の本質に關して或る種の解明に到達してゐなければならぬ。即

ち宗教と社會との問題の考察は一般宗教學の課題を前提する——同様な意味で我等は、宗教と社會との問題の考察は一般社會學の課題を前提すると言ひ得るであらう——)。かくて此の方面より考察の歩を進めて行くにあたり、我等は便宜上次にデュルケームの所説を敘述し批判することとしよう。^(註五)

デュルケームに依れば、宗教とは、聖物、換言すれば分離され禁忌された事物と關連する信念と行事との、教會と呼ばれる同じ道德的共同社會に、これに歸依するすべての者を合同する信念と行事との連帶的體系である。^(註六)

宗教的信念を宗教的行事と同じく特質づけるのは、それが拘束的であることである。^(註七)しかるに拘束は命令を含み、従つて又指令をする權威を含むから、拘束的なものは總て社會的起源を持つてゐる。個人が自己の行爲を一致せしめてゐるやうな若干の規準を課する道德的權威は——若し我等が經驗の領域を超えることを避けようとするならば——集團を除いて他にもとめることは出来ない。經驗的認識では、人間よりも偉大な思惟する唯一の存在は、個人力の綜合たる社會である。我等が社會に直面してそれに不斷に倚據してゐる状態が、吾々に宗教的畏敬

の感情をそれに對して生せしめるのである。されば、信者に信すべき教義を守るべき儀禮を規定するのは社會である。しかして若しも事實かくの如くであるならば、それは儀禮も教義も社會の作品であるからである。彼は云つてゐる。「宗教表象とは集合的實在を表明する集合表象である。儀禮とは、集團の中でのみ生れて、かゝる集團のある心的状態を刺戟し若くは更新する筈の行動の様式である。」^(註八)宗教は起源を個人的感情にではなく集合的精神の状態に發し且またこれらの状態によつて變化する。もしも宗教が個人の體質に基礎を置いてゐたならば、彼に斯くの如き強制的形相では現はれなかつたであらう。

然も又彼は他面に於て云つてゐる。「人が世間と自己とになした表象の最初の體系が宗教的起源のものであつたことは以前から知られてゐた。神性に對する思索であると同時に宇宙論でない宗教は存しない。哲學と諸科學とが宗教から生れたと云ふのは、宗教が最初は自ら科學と哲學の代りをしてゐたといふことである。しかるに尙一層注意されなかつたことは、宗教は豫め形成されてゐた人間精神をいつかの理念で豊富にしただけでないと云ふことである。宗教は精神を

のものを形成するに貢献したのである。人はその知識の材料だけでなく、これらの知識が加工された形態をも亦非常に多くを宗教に負ふたのである。^(註九)彼によれば、我等の判断の根本に存しあらゆる知的生活を支配してゐるいくつかの基本的概念、即ちアリストテレス以來悟性の範疇と呼ばれてゐるところの時間、空間、屬、數、原因、本體、人格等も、我等が原始的な宗教信念を組織的に分析してゐると、必然その途上で之等に出會する。これは宗教の中に於て宗教から生れた。これは宗教思想の所産である。

ところで斯く範疇が宗教的起源のものであるとすれば、それはあらゆる宗教事實に共通な性質を分有してゐなければならぬ。即ち、自らも亦社會的事物、集合的思想の所産でなければならぬ。少くとも、範疇は社會的要素に富んでゐると推定しなければならぬ。而してデュルケームは斯くの如き洞察を、時間、空間、屬、力、人格、効力、矛盾等の諸概念に就いて證明しようとしてゐるのである。

上に我等は當面の問題に必要な限りに於てデュルケームの思想を敘述して來たが、先づ我等は、デュルケームがモス(Mauss)、ユベル(Hubert)等の所謂デュルケミア

ンと共に、今迄常に宗教のア・プリオリの要素に妨げられて社會學的方面を等閑に附してゐた神學的宗教學に對して、宗教社會現象の經驗的實證的研究を開拓してゐるの功は充分に之を認めなければならぬ。然し我等は假令此の點にデュルケームの功績を認めるに吝でないにしても、彼の極端なる「社會學主義」によつて、宗教のア・プリオリな本質が全く排除されてゐる點に對しては、贊意を表するわけに行かない。彼によれば、アリストテレス以來悟性の範疇と呼ばれる所のもの、即ち我々の判断の根本に存してゐるいくつかの基本概念(即ち時間、空間、屬數、原因、本體、人格等)も、社會的事物、集合的思想の所産でなければならぬ。彼が斯く考へた理由は何處にあるであらうか。それは、上に略述した所よりも知られる如く、彼がこれを宗教の中に於て宗教から生れたと觀じた點、即ち宗教的思想の所産であると觀じた點、及び宗教は著しく社會的なものであり、宗教表象とは集合的實在を表明する集合表象であると考へた點に存する。彼に在つては、宗教は全くその社會的規定性の方面より考察されてゐるのである。彼によれば、宗教の起原は社會それ自體に發する。宗教的概念は、社會の特性の象徴に外ならない。神聖物即ち神は

人格化された社會に外ならないのである。されば、ヴァッハ (Wach) は當然にもデュルケームに就いて、彼は人間社會と神性とを等置してゐる、即ち神學と社會學とを等置してゐると述べてゐる。^(註一〇) 然し宗教の本質をその社會的規定性の方面のみより完全に解明しうるであらうか。斯くてはそれに獨自な本質は失はれないであらうか。私は、デュルケームの「社會學主義」に反對して、宗教にその獨立なる本質を保證するものは、實に、そのア・プリオリの要素だと考へる。即ち私には、宗教現象の研究よりア・プリオリの要素を除き果してそれが充全たるを得るや否や、甚だ疑なきを得ないのである。この意味に於て在來の所謂神學的宗教學に對しても、十分存在の理由を認めることが出來ると思ふのである。それはさて置き、デュルケームに在つては、如上の宗教の本質に關する謬見により、宗教社會學に獨自な問題が何等明確に指示されてゐない。こゝでは、問題が充分よく設定されてゐないのである。

かく宗教を「社會的事物」と考へる所よりして、デュルケームの宗教社會學的研究は主として原始民族殊にアウストラリヤ土人に向けられ、然もかく原始宗教に一

種の特權を與へ他よりも好んで研究の對象にすることに對して、彼はいつに方法上の理由を擧げてゐる。即ち彼によれば、^(註二)(一)最近の宗教の理解に至るには、先づその最も原始的で簡単な形態に溯り、その當時その形態が如何なる特質によつて決定されたかを考究することに努め、次でそれが如何にして次第に發展し複雑化し、如何にして現在の形態となつたかを示さなければならぬ。即ち、それが漸次に形成された様式を歴史上に辿つてみななければならぬ。かくの如き一系の漸進的説明に於て重要なのは、その懸つてゐる出發點を如何に決定するかである。然もデュルケームに在つては、茲に我等が見出さねばならぬのは具體的の實在である。これはたゞ史的及び民族學的の觀察によつてのみ示され得るものである。

(二)上の間接的な反動的理由の外に原始宗教の研究は極めて重要な直接的利益を齎すものである。あらゆる信仰の體系や禮拜の根柢には、必然的に一定數の基本的表象や儀禮上の態度が存して居り、これらはそれを裝ふ形態を相互に異にしてゐても到るところ同一の客觀的意義を有し、また到るところ同一の機能を充たしてゐる。宗教に於て永遠で人間的なものを構成してゐるのはこれらの恒久的

な要素である。これらは一般に宗教と云ふときに表はされてゐる觀念の客觀的な全内容である。而してこれらの總ての宗教に共通的なものに到達するには、低級社會を觀察するに限る。蓋し、其處では個性が最も發達してゐないこと、集團の範圍の狭いこと、外的狀況の同質性、總てが差異や變化を極小にするに役立つ、從つてそれら共通的なものは、裸形のまゝで示され、觀察するに委せてあるからである。低級社會では從屬的のもの、二次的のもの、即ち裝飾的な發展がまだ根本的のものを蔽つてゐないのである。すべてが、それなくしては宗教は成立しないと云ふ不可缺なものに還元されてゐる。(三)然し、原始宗教は宗教の構成要素を抜き出しうるのみではない。それは宗教の説明を容易ならしめると云ふ莫大な利益をもつてゐる。それでは事實がより單純であるから、事實間の關係も亦より明瞭である。以上我等はデュルケームが原始宗教研究に一種の優越を認めて居る根據を大略乍ら知つたのであるが、彼の根據とする所は勿論或る意味に於て首肯し得る。宗教そのものの解明に當り、その歴史的研究殊にその發生的研究が甚だ重要な事は、他の文化現象の解明に當つてと同様、異論のない事だと思ふ。事實デュルケーム

ム自身もこの意味に於て大なる貢獻をなしてゐる。然し茲に我等がデュルケームの歴史的發生的方法に共鳴するのは、實に、歴史的社會的存在としての宗教についてである。殘された價值としての宗教の一面に就いては、歴史的發生的方法は全く無力に對立する。デュルケームによれば、總ての宗教に共通的なもの、即ち宗教にとり最も根本的なものは、原始宗教に於て裸形の儘で示され、觀察するに委せられてゐる。然し、時間上後れて發生するもの必ずしもその意味上第二次的副次的のものとは限らない。假令時間上後れたものと雖も、先行者に對して一次的本源的のものである事もあり得る。宗教の本質に先に述べたが如きア・プリオリの要素を認めて來るならば、かゝる要素が明瞭に看取し得られるのは却つて歴史的に發達した宗教に於てであると思ふ。宗教そのものに含まれるア・プリオリの要素は、凡て一般に價值的なものがさうであるやうに、決して發生的には解明し得られないのである。我等は茲にカント哲學の精神に還つて、發生の問題と價值の問題とは厭く迄も之を峻別しなければならぬ。

されば我等が宗教を考察するに當つては、その社會學的本質の外に、否それより

も先に宗教的アプリアリそのものに着目しなければならぬと思ふ。我等は今之を「宗教的なるもの一般」と稱ぶ。之は、何れの歴史的社會的宗教にも包含せられ、然もそれをその核心に於て規定する所の理念乃至信仰（その現はれとしての實踐を含めた意味下）である。是の理念乃至は信仰が形式的に如何に解釋せられやうと、即ちスピノーザ(Spinoza)に於ける如く「宗教とは完全なるを知りて、神明を愛慕する事なり」と解されやうと、或はシュライエルマツヘルに於ける如く「依存の感情」と解されやうと、或は又ヘーゲル(Hegel)に於ける如く「宗教とは絶対的精神の自己關係にして、哲學が概念の形にて有せる思想の内容、即ち絶対的實在を表象の形式によりて現はせるものなり」と解されやうと、それは今當面の問題とはならない。兎に角、茲に宗教の本質として、一切の歴史的社會的變遷に生き残り且つ之を貫き、然も宗教の中核をなす所の「宗教的なるもの一般」^(註三)を考へて來ることが出來ると思ふ。然も是れは、其れ自身一の自律性を有するものであり、従つてそれ獨自の内部的發展を遂げるものと云はなければならぬ。我等は、かくの如き「宗教的なるもの一般」の類型として「佛敎的なるもの」、「基督敎的なるもの」等等を擧げることが出來る

と思ふ。(この點に關して示唆する所多きマックス・ウェーバーの見解に觸れたいのであるが、今はその餘裕なきため暫く措く)然しながら、宗教的なるもの一般は、そのみにて決して現實の宗教、即ち現實の歴史的社會的宗教とはならない。總て精神的なるものは、それが社會的存在をかち得るが爲には、或る種の象徴化形態化形式化は免れることが出來ない。然もこの形態化に當つては、その社會的生存の必要上、當該社會に適應した形態を取るべく餘儀なくされるのは止むを得ぬことである。茲に宗教の歴史的社會的要素を認むべき所以があるのである。かくの如き歴史的社會的角度より我等は、宗教の教義、宗團、儀禮等を考察することが可能である。宗教社會學的問題の領域をなすものは、實に、此等の宗教の歴史的社會的現象形態に外ならない。さればゾッハは云つてゐる。「社會化されるのは……形態的な宗教である。故に宗教社會學は常に……その問題の領域が一定の歴史的宗教の理念の形態にあり、純粹な斯くの如き理念そのものにない事を意識して居らねばならぬであらう。理念そのものは決して残る所なく歴史に於て現はれることはないのである。」^(註三)されば今我等は現實の生ける歴史的社會的宗教を考へる

ならば、我等はそこに、上に述べたが如き宗教の二面性を認めることが出来るのである。歴史的社會的宗教は、原則上「宗教的なるもの一般」と當該歴史的社會的狀態との辯證法的統一に外ならないと思ふ。

さて以上の如き考察を基礎として、然らば宗教社會學そのものに課せらるべき問題は如何なるものであるかの考察に這入つて行くこととしよう。我等の見地に立てば、エルンスト・トレルチが其の著「精神史並に宗教社會學論考」の緒論「宗教、經濟と社會」に於て述べてある所はよく宗教社會學の主要課題を指示してゐると思ふ。彼はそこに、基督教研究に當り問題の重心を次の諸點に置いてゐる。(註一)

第一に、宗教の全き内面化及び精神化にあつては、宗教は社會的並に經濟的生活との錯雜より自由にされるのである。しかし此の事はまた、此の世俗的な生活世界に對する直接的な影響及び規定が宗教的思想よりは甚だ發展し難いといふことを意味してゐる。宗教的思想は、理想世界の高處に搖めきながら、具象的な生活狀態と其の力強い利害關係的組織とに無力に對立してゐる。このことは逆に次の事を意味する。即ち經濟的作業は今や其自身に委せられ、而して其の利害關係

と合目的性との合理主義を全く妨げられることなしに、其れ自身純粹なる世界的原理として發展し得るといふことである。が、經濟的社會生活の合理主義は結局經濟的生存競争として形成されるから、此の宗教的倫理は到る處、其れによつて直接妨げ得ざる合理的生存競争に對立するのである。宗教的理想世界は、此の合理的生存競争を組織し破壊する固有の直接手段を含んでゐない。世俗的の目的觀其れ自身が斯かる競争を統御するに據る所の合理的手段を指定されるのである。性格の宗教的神聖化も同胞愛も、此の問題を直接に又其れのみから解決することは出來ない。ペンジャミン・キッドの「社會進化」に關する書は、此の事實關係を全く適當に認識し、純粹合理的原理としての生存競争の合理主義を、上位に置かれた愛の原理からの權威と秩序との宗教的原理に對立せしめた。若し事態にして然りとすれば、問題の解決は此處では常に、生存競争を靜止せしむるか或は之を抑制する何等かの手段に存するわけであるが、宗教は到底此れを自己自身より發展せしめることは出來ない。解決は常に或る何等か宗教に好都合な、其れに迎合的な、即ち宗教よりたゞ利用せられるに止る所の、合理的若しくは偶然的な生存競争の自

己統御に倚らなければならぬ。つまりは、一般に、現實的生活との妥協及び調停が問題となるであらう。

第二に、ここで支配してゐる宗教的思想は、無論それ自體純粹に宗教的、觀念的性質であるやうに見える。何となれば、其の出發點は、自然生活の直接的な禮拜的結合、即ち共同團體の自然的形式と禮拜的形式との一致ではなく、倫理的理想であるからである。が、其の獨立性は此處に於ても非常に限定せられたものである。その際の現實的關係は初め一見したよりも遙かに複雑である。即ち、基礎的の理想は、實は、此處に於ても亦決して實在的にして具象的な土臺——此の上に又此れに對立して其の理想は起るのである——から左程に懸け離れてはゐないのである。イエス自らの理想はガリレアの經濟的段階と風土的自然的狀態とに關聯して居るのである。従つて、其れは近世の大都市に於ては生れることが出来なかつたであらう。而して全く其れと同じやうに、總て後の基督教時代の經濟的理想も、無意識的に、又其れを欲せぬにも拘らず、其の發生する土壤の色彩を既に帯びてゐる。其の理想は常に時と場所とに屬する或る物を含んでゐる。所が、此れをば單に其

れだけのものとしては受取らず、永久の眞理、神の要求、聖書の解釋に迄神聖化する
のである。丁度聖書の理想世界が、社會的にも、經濟的にも其の根據を究められる
やうに、總て後の聖書の解釋も亦、其の折周圍の前提となるやうな自明的なものに
依つて規定せられてゐる。カトリック教、ルーテル教、カルヴァン教、諸々の宗派、神祕
主義者等は、聖書をば、或る一定の自明的なものと考へらるる社會學的假定より讀
み、而して此れを彼等は、聖書により是認せられ、定められてゐると見ようとするの
である。併し乍ら、又上とは逆に、外見上専ら哲學的な而して又合理的な、或は又、純
粹に慣習傳習として生じて來る行爲の仕方も、無論無意識的に基督教的假定によ
り規定せられ、而して全然世俗的な制度と見られるものにも、基督教的精神が多量
に含まれてゐるのである。此の關係は何時でも場合場合を見て始めて明かにさ
れ、確定せられなければならない。かの近世の概括の要求が甚だ好むやうな、進歩
的發展の普遍的な法則なり法式なりは此處には存して居らない。たゞ一進一退
する力の運動があるのみである。而して其の結果は大きな時代を支配するところ
の、經濟的社會的生活の理念の各々の特殊の場合に於て、始めて確定されなければ

ばならない。

第三に考察せらるべきは、基督教的理念は、丁度其の純粹の内面性のために、又最高に高められた宗教的者の獨立性のために、何等の直接的感化の手段も有しないと云ふこと、而して又非常に理想主義的な倫理的要求も、其のみでは斯かる手段をなさないと言ふことである。直接の純粹觀念的感化が主張されてゐるにも拘らず、基督教的理念が其の主な感化を行ふのは、實に、倫理的要求に依つてではなく、間接に其れに依りて造られる宗教的結社に依つてである。斯くの如き宗教的結社は、教理的、崇拜的な而して又純粹に宗教的な理念より出で、而して決して世俗の社會的目的のために企てられない。故に、其れは又、純粹合理主義の如何なる社會的構造も有してゐないやうな、組織化的、結合的な力を持つてゐる。而してそれが又此の強い社會學的形式を以て總體生活を圍繞し、其の精神的倫理的自明性を形成するものである事は、丁度フステル(Fustel)が古代の祖先並に國家崇拜に於て示した通りである。カトリック教並にプロテスタント教に於ては、確かに、其れ等が培はれた、社會的基礎の或るものが附着してゐる。然し乍ら、それにも益して、權威、

施設、個人主義の純粹に宗教的社會學的組織は一般的文化雰囲気の規定し、而して其れを通じ始めて、社會と經濟とに於ける世俗的生活に感化を及ぼしてゐる。それ故、倫理的觀念の外見的獨立性にも拘らず、此處にも又マルクスの問題が成立するのであるが、然し此の問題は單に宗教的なるものが社會的なるものに依屬する事を意味するのみならず、又逆に社會的なるものが宗教的なるものへ依屬する事をも意味するのである。個々の場合に於て存立するところのものは、一の普遍的理論に依つてではなく、只個々の場合の研究に依つてのみ明かにされうるのである。然し乍ら、亦同じやうに此處から明かになつて來ることは、經濟的合理主義は、其れが無制限的獨立に眼覺めた場合には、此の宗教的社會學的拘束に反對し、而して此れとは全く獨立に展開すべく努めるだらうといふことである。

上に紹介したのは、基督教研究に當つてのトレルチの態度であるが、然しこの態度は一般の宗教社會學的研究に於て維持出來ると思ふ。主動性は、宗教及び社會の何れにも之を認めて來なければならぬ。然し斯く双方に主動性を認めることとなれば、上にトレルチが第一の點で指摘してゐるやうに、宗教と社會との兩者

は全く對立關係に置かれて仕舞ふ。このことは、今之を宗教の側より云へば、此の世俗的な生活世界に對する直接的な影響及び規定が宗教的思想よりは甚だ發展し難いことを意味する。而して又この同一のことは、社會生活（——トレルチの場合では主として經濟生活が問題となつてゐる——）に在つては、例へば、經濟的作業が「其自身に委せられ、而して其の利害關係と合目的性との合理主義を全く妨げられることなしに、其れ自身純粹なる世界的原理として發展し得るといふこと」を意味する。元來、社會生活殊に經濟生活は、目的合理的なるもの、世間的なるものであり、従つて效利的色彩が濃厚であるに反して、宗教は、殊に高度に發展した宗教は、卑近な現實的效利を超越し、その内面性、精神性を極度に昂揚しようとする。かくて社會と宗教との間には、原理上、二律背反が保たれる。然しこの二律背反は常に維持され得るであらうか。かくては宗教社會學なるものがその存在權を喪失して仕舞ふこと勿論であるが、トレルチ所說の第二の點は、兩者の間に關聯の存立すべき餘地あることを示してゐる。我等も亦、先に宗教の本質について述べるに當つて、その社會的側面について述べて置いた。我等の宗教的理念は、その内面性、精神

性を如何に昂揚しても、それらの理念が實現されうるのは、實にこの現實の社會生活に於てあり、従つて又現實の社會法則に従つてである。茲にこの二つの世界の間には極めて複雑な結合乃至は連關が成立する。我等は今この結合乃至は連關をば、大略、宗教の社會に對する影響と、社會の宗教に對する影響とに分ちて考えることが出來ると忍ぶ。尙この間に在つて宗教的結社の持つ特種の意義に就いては上にトレルチが第三の點に於て述べてゐる通りである。上と似た豫想の上にワツハは當然にも宗教社會學の課題をば、甚だ漠然としてゝはあるが次の如く述べてゐる。「されば、宗教社會學は、宗教と社會との相互的影響の研究であり、宗教的に規定せられたる結社、その形式乃至形態の學である。(註一五)我等は此處で宗教社會學の課題を詳細に述べる餘裕を持たないが、今上の原理的立場に立つて大略列舉して見るならば、宗教の社會に對する影響の問題としては、宗教が社會の構造、形態並びに運動に及ぼす作用の問題(マックス・ウェーバーの宗教社會學は、宗教に於ける經濟倫理と、それがその宗教圈の中にある諸民族の經濟組織及び生活に及ぼす影響を中心課題としてゐる)を擧げることが出来る。又社會の宗教に對する影

響の問題としては、宗教の教理、儀禮等に現はれたる社會的影響の問題、即ち、宗教の教理、儀禮等が當該社會に適應せんが爲め如何に變容され又如何にその社會の影響をうけるに至つたかの問題である。ここで就中代表的なものとして先づ文化社會學を擧げることが出来る。又宗教を一つのイデオロギイと見て社會の經濟的基礎構造と必然的關聯に置き之に宗教の説明原理を覓める所のマルクスの唯物史觀も此處に屬する。尙以上二の主要問題の外に、宗教のある類型と社會のある形態との間に於て果して何等かの關聯が存立すべきや、若し存立すべきものとすれば、その根據如何、又宗教の發展段階と社會の發展段階との間に果して何等かの並行關係が存立すべきや、若し存立すべきものとすれば、その根據如何等の問題が存してゐる。尙又、それにも益して重要なのは、宗教の結社形成に及ぼす作用並に結社そのものの問題である。

(註一) Troeltsch, Religion, Wirtschaft und Gesellschaft (Gesammelte Schriften, Bd 4, Tübingen 1925), S. 21.

(註二) Schleiermacher, Ueber die Religion, Berlin 1799 2 Aufl. Berlin 1806. (風間氏譯シヤロ)

(註三) Cooley, Social Organization, New York 1924, p. 374—375.

(註四) Ellwood, *The reconstruction of religion*, New York 1923, P. 40—41.

(註五) 次の敘述は、名譯との許ある古野清人譯デニルケーム『宗教生活の原初形態』(刀江書院)に據つた。ここに記して責任を明かにすると共に、譯者氏の勞に感謝の意を捧げる次第である。

(註六) 同上書上卷七〇頁

(註七) 同上書下卷附錄デニルケーム『宗教現象の定義について』三二—三三頁

(註八) 同上書上卷一四頁

(註九) 同上書上卷一三頁

(註一〇) Wach, *Einführung in die Soziologie*, Tübingen 1931, S. 14.

(註一一) 以下の敘述に關しては前掲『宗教生活の原初形態』上卷四頁——一頁參照

(註一二) 唯だ更に此處に私の問題となるのは、宗教的なるもの一般も亦、生命の生成流轉の中に存せざるやと云ふことである。宗教を一の體驗と見るならば、生命の流轉との連關は甚だ密接に保たれて居りはしないだらうか。此の點は此處ではたゞ問題とするに止めて置く。

(註一三) Wach, a. a. O., S. 12.

(註一四) Troeltsch, a. a. O., S. 29—32.

(註一五) Wach, a. a. O., S. 92.